

道徳教育用教材の書き込み欄に関する基礎的考察

— 学校・家庭・地域の「連携」に着目して —

塩原佳典

〈Summary〉

This paper reconsiders “cooperation” between schools, families, and the local community in the moral education teaching materials issued by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. In specific, the portions of the teaching materials where students fill in answers were used as data and analyzed. As new versions of moral education teaching materials are continually issued, the number fill-in portions themselves and the number of cases in which these portions must be filled in by the family (“someone at home”) has increased. Thus, there has been a process of increasing “cooperation” between schools and families with regard to the fill-in portions. However, cases in which community members are asked to complete such portions are nonexistent. This paper points out that it is necessary to consider “cooperation” with the local community through means other than fill-in answers, such as reading materials, teaching materials, research by students outside of class, etc.

はじめに

道徳の「教科化」¹⁾が目前に迫っている。小学校では2018年度、中学校では2019年度より完全実施の見通しである。

小中学校における「特別の教科 道徳」実施の決定は、直接的には中央教育審議会答申「道徳に係る教育課程の改善等について」(2014年10月)を受けたものである。ただし道徳教育の強化を求める動きは、1950年代末の「特設『道徳』論争」など、敗戦直後より継続してきた²⁾。本稿では、これら道徳教育の強化を図る一連の動向のうち、2000年代に入り文部科学省が全国の小中学校の子どもたちへ配付し始めた道徳教育用教材に着目したい。すなわち『心のノート』(2002年)、『心のノート(改訂版)』(2009年)、『私たちの道徳』(2014年)、そして『私たちの道徳(改訂版)』(2016年)である。これらの教材に対しては、「補助教材」のような制度的な位置づけの曖昧さ、あるいは内容に関わる問題性が指摘されている。とりわけ2002年の『心のノート』刊行直後には、批判的な認識が示されていた。すなわち三宅晶子や高橋哲哉が、「愛国心教育」的で現状の社会・秩序への批判的思考力が育ちにくい内容構成や、そもそも国家権力が子どもの「心」に介入することそれ自体に疑問を呈している³⁾。一方近年では、詳細なテキスト分析やそれにもとづく教材の「活用」、あるいは教師教育に関する研究が多く蓄積される傾向にある⁴⁾。その背景には、道徳の「教科化」を目前に控え、高等教育で教職課程を担当する教員と

しての「業績」が求められている事情が垣間見える。

道徳教育をめぐる如上の研究動向について、批判的な見解を示したのが折出健二である。折出は、「教科化」に対する教育学界の反応が教材論、評価論、教師養成論に「傾斜」していると指摘する。そのため、「そもそも公権力と道徳の関係はどうあればよいのか、子どもたちにとって道徳性および道徳の学びとは何か」といった根源的な問いが見られないという⁵⁾。筆者は、折出の認識を共有するものである。しかしながら、道徳の「教科化」はすでに政策的に決定され、完全実施を目前に控えている。こうした状況にあっては、道徳教育のあり方そのものを問い直す視座を保持しながら、現に普及している教材のより精緻な内容分析もまた、必要だと考える。文部科学省刊行の道徳教育用教材は、現状ほぼすべての小中学校で「活用」されている⁶⁾。とすれば、その内容的特質や変遷を検証することで、「教科化」後の道徳教育のあり方を批判的に見据える手がかりが得られるのではないか。

以上のような問題認識のもと、本稿では、文部科学省刊行の道徳教育用教材『心のノート』と『私たちの道徳』について、基礎的考察を試みる。その際、時津啓の研究を参照することで、分析の視点を定めたい。時津は、『私たちの道徳』が生まれた政治的な文脈すなわち政治・行政の側の意図をふまえたうえで、それらがいかに教材の内容に反映されているかを検討している⁷⁾。時津によれば、『私たちの道徳』は、前政権との違いを強調したい自由民主党政権による「政局がらみの教科化」のなかで、学校教育を通じた「家庭教育の道徳化」をも目指して刊行された⁸⁾。そこには、少子化の影響などで学校教育の相対的地位が低下するなか、家庭や地域における教育へも関与していこうとする教育行政の側の意図が窺えるという。そして、時津は、こうした政治的意図が色濃く反映された箇所こそ、書き込み欄にほかならないと指摘する。確かに『私たちの道徳』には、「家の人から」と題された書き込み欄が多く盛り込まれている。

時津の研究をふまえれば、書き込み欄は、道徳教育に関与することが期待されているのは誰なのか、その具体像を浮き彫りにするうえで有効な手がかりとなる。ただし時津の分析は、2014年刊行の『私たちの道徳』のみについて、学年ごとに比較するとどまっている。前述の通り、文部科学省による道徳教育用教材の刊行は、2002年の『心のノート』刊行から数えれば、3度の改訂を重ねている。とすれば、各版の書き込み欄を比較することで、「家庭教育の道徳化」へと至る過程を明らかにできるのではないか。

そこで本稿では、まず改訂の経緯や各版の概要をとらえる。そのうえで書き込み欄の変遷を検討する。これにより、どのような主体が道徳教育に関与すべきと期待されてきたのか、その特質について考察を加える。

1. 文部科学省発行の道徳教育用教材の変遷と特徴

本章では第1節において、書き込み欄の内容分析に入る前提として、刊行や改訂の経緯について概観しておきたい。続く第2節で、教材の内容構成に関わる特徴として、①学習指導要領で示

された4つの視点で区分されている点、②学校と家庭・地域社会との「連携」を図る形での活用が一貫して意識されてきた点を確認する。これらの特徴をふまえることで、書き込み欄に注目する意味がより明確になると考える。

(1) 刊行と改訂の経緯

『心のノート』は、依義文によれば、2001年度に7億3千万円、翌2002年度に3億8千万円の予算が組まれ、作成・刊行された⁹⁾。少年事件の「凶悪化」やいじめの「増加」などへの危機意識を背景に、国費により道徳教育用教材が刊行された。ただしこうした少年事件をめぐる現状認識が、必ずしも事実即したものでないことには注意したい¹⁰⁾。いずれにせよ、こうして刊行された『心のノート』は、2002年春に全国の小・中学校へ無償配布されることとなる。『心のノート』は、小学校1・2年用、同3・4年用、同5・6年用、そして中学校用の全4種類が存在する。このうち、小学校1・2年用のみ『こころのノート』というタイトルである。本稿では、『心のノート』と統一して表記する。奥付を確認すると、刊行年も執筆者の一覧も記載されておらず、「発行 文部科学省」とのみ記されている。執筆者が記されていないため叙述の責任主体が曖昧である。ページ数は学年順に、全80ページ(1・2年用)、全96ページ(3・4年用)、全112ページ(5・6年用)、全128ページ(中学校用)である。

形式に関わる特徴としては、見開き1ページのポスター形式が多用され、各テーマが簡潔に示されている。たとえば図1は小学校5・6年用からの引用である。富士山と思われる写真を背景に「見つめようわたしのふるさとそしてこの国」との一文が示され、「郷土」と「国」とを直截に結びつけて「愛する心」の重要性が説かれている。政策担当者の側では、ポスター形式にすることで、「一部をコピーして校内に貼」ったり、「町内の掲示板に掲示」したりすることも想定されていた¹¹⁾。



図1. 『心のノート』 小学校5・6年用、96-97 ページ

『心のノート』については、制度的な扱いがきわめて曖昧であると指摘されている。奥野佐矢子による研究を参照しよう。奥野によれば、『心のノート』は、文部科学省の検定や各教育委員会の採択を経た「教科書」でも、各学校が採用して教育委員会に届け出る「副読本」でもない。文部科学省による『心のノート』の位置づけは、教科書や副読本と「相まって活用」することにより「道徳教育の充実に資する補助教材」というものであった¹²⁾。奥野によれば、『心のノート』は、「制度的な位置づけの曖昧さ、不安定さ、それにもかかわらず、ある種の強制力をも」つ状況下で使用されてきた¹³⁾。

その後2009年、『心のノート』が改訂された。前年に公示された学習指導要領の改訂に対応したもので、「約4億円」の予算をかけ、新たに「法やきまりの意義」など規範意識に関わる記載を増やしたと報じられている¹⁴⁾。ページ数は学年順に、全103ページ(1・2年用)、全112ページ(3・4年用)、全128ページ(5・6年用)、全144ページ(中学校用)である。いずれも改訂前に比べ、ページ数が増加している。

さらに2014年、『私たちの道徳』が刊行された。文部科学省によれば、『心のノート』を「全面改訂」したものであるという¹⁵⁾。改訂の内容については、「偉人」の伝記や説話などを紹介する「読み物教材」が多く加えられた点に特徴がある。この改訂事業は、「道徳関連予算」14億円により実施された¹⁶⁾。『心のノート』と同様の学年構成で全4種類が作成され、小学校1・2年用のみ『わたしたちの道徳』となっている。ただし本稿では、『私たちの道徳』に表記を統一する。ページ数は学年順に、全160ページ(1・2年用)、全176ページ(3・4年用)、全192ページ(5・6年用)、全240ページ(中学校用)である。「読み物教材」の追加もあり、『心のノート』よりページ数が大幅に増えている。

制度的な扱いについて、文部科学省は「道徳教育用教材」という表現を用いている。しかしその位置づけは、曖昧なままである。実際、時津が明らかにしたように、国会における議論では「副読本」や「副教材」はおろか、「教科書」とすら位置づける答弁も存在していた¹⁷⁾。『私たちの道徳』は、概念の整理が曖昧なままに、刊行・配付そして小・中学校の現場で実際に「活用」されていくこととなる。

最後に2016年、学習指導要領の改訂にともない、『私たちの道徳』改訂版が発行され、現在に至る。「問題解決型題材」が盛り込まれ、子ども自身が「考える」道徳教育を行うものと評価されている¹⁸⁾。ページ数は学年順に、全176ページ(1・2年用)、全192ページ(3・4年用)、全208ページ(5・6年用)、全256ページ(中学校用)である。改訂を重ねるごとにページ数が増え続け、初版『心のノート』に比べると倍増している。

(2) 構成と扱い方に関わる特徴

本節では、『心のノート』と『私たちの道徳』に共通する特徴について指摘する。これにより、書き込み欄に注目して分析する際の視点を明確にしたい。

第一に、いずれの教材も、4つの視点で区分される内容構成となっている点に特徴がある。こ

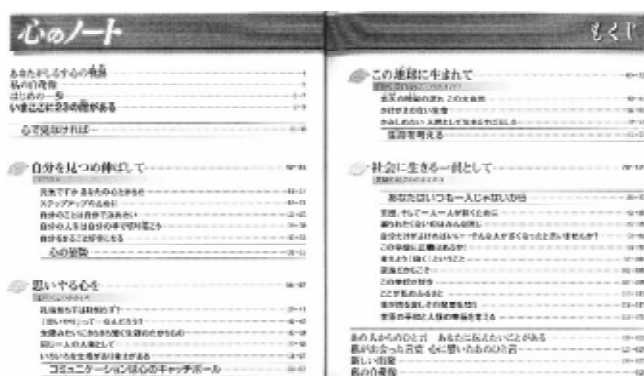


図2. 『心のノート』（中学校用，初版）2 - 3 ページ

ここでいう4つの視点とは、1989年以降の学習指導要領が道徳の内容として示してきた項目にもとづいている。すなわち、①「主として自分自身に関する事」、②「主として他の人とのかわりに関する事」、③「主として自然や崇高なものとのかわりに関する事」、④「主として集団や社会とのかわりに関する事」である¹⁹⁾。『心のノート』および『私たちの道徳』は、これら4項目にもとづき構成されている。一例として、『心のノート』初版の中学校用の目次をみてみよう(図2)。①「自分を見つめ伸ばして:自分自身」、②「思いやる心:他の人とのかわり」、③「この地球ほしに生まれて:自然や崇高なものとのかわり」、④「社会に生きる一員として:集団や社会とのかわり」と、学習指導要領の4項目が反映されている。その他の教材も同様で、小学校低学年から中学校まで、4項目に沿った内容を繰り返し学ばせる形式になっている。小林万里子によれば、同じ内容を発達段階に応じて「スパイラルアップ」させていく形式は、「日本の学校における道徳教育の特質」といえる²⁰⁾。

『心のノート』と『私たちの道徳』はともに、4つの項目に即した内容を学年に応じて追加していく形で構成されている。こうした特徴をふまえ、本稿で行う内容分析の対象を小学校低学年(1・2年用)に限定する。4項目が繰り返されている以上、すべての学年を扱うよりも、もっとも情報量が少ない1・2年用のみを分析することで、その特質をより鮮明に別出できると考える。

第二に、文部科学省が、道徳教育をめぐる学校・家庭・地域社会の「連携」を求め続けてきたことに注目しておきたい。いくつか事例を確認しておこう。まず『心のノート』が刊行・配付された直後、文部科学省関係者による誌上鼎談が催されている²¹⁾。ここでは、「学校がひとつの軸となつて、家庭・地域と一丸となつて子どもの心を育てる雰囲気をつくっていく」こと、あるいは「『心のノート』は学校教育のなかだけで活用されるのではなく、家庭・地域社会においても活用されることなど、三者の「連携」が繰り返し促されている。さらに『私たちの道徳』が刊行された2014年の7月8日には、文部科学省が都道府県教育委員会等へ「本教材を児童生徒一人一人が持ち帰り、家庭や地域でも活用していただけるよう指導をお願い」する「事務連絡」を

送っている²²⁾。最後に同年10月の中央教育審議会答申「道徳に係る教育課程の改善等について」でも、「学校と家庭や地域との連携の強化について」との項目が立てられている²³⁾。

2002年の『心のノート』刊行・配付から現在まで、道徳教育をめぐる学校・家庭・地域社会の「連携」が一貫して求められてきた。道徳教育用教材についていえば、「連携」への志向がとりわけ反映されてきたのが、書き込み欄だといえよう。たとえば『私たちの道徳』指導資料でも、「書き込み部分については、家庭や地域の人から話を聞いて記入する欄を充実するなどの改善を図った」と、改訂の意図が説明されている²⁴⁾。書き込み欄は、本稿のはじめにで紹介した時津の研究から引用すれば、学校の道徳教育を通じた「家庭教育への政治的な介入」をめぐるひとつの焦点にほかならない。とすれば、「介入」がいかにかに推し進められてきたのか。その過程を明らかにする手がかりとして、『心のノート』から『私たちの道徳』へと至る変遷を書き込み欄に即して検証したい。

2. 道徳教育用教材における書き込み欄

(1) 書き込み欄の分類方法

前節での検討をふまえ、『心のノート』と『私たちの道徳』の1・2年用について、書き込み欄を網羅的に抽出し一覧表を作成した（巻末資料1, 2）。具体的な内容分析に先立ち、抽出の方法について補足しておきたい。

第一に、書き込み欄を抽出する際に一つのテーマをひとまとまりとみなし、欄が複数設けられ

図3. 『私たちの道徳1・2年用』改訂版, 13ページ

ている場合も一件とカウントした。たとえば図3では、「教科書」や「ランドセル」などを確認して色を塗らせる欄が複数設けられている。この場合は、「みの回りのものを、かたづける」というひとつのテーマとして抽出した。

第二に、同じテーマでも学年ごとに重複している場合は、それぞれ1件ずつとみなした。このことにより見えてくる論点については、次節で改めて言及する。ここでは、図3についていえば、「家の人から」欄を含めて計3件の書き込み欄が抽出されることを確認しておきたい。

第三は、書き込む主体の分類についてである。巻末資料に示した通り、書き込む主体として、児童、教員、家庭の人（「家庭」と略記）などが主に抽出された。このうち、ごくわずかではあるが、児童に聞き取りを行わせる課題が存在する。この場合、巻末資料には聞き取りの対象を入力し、そのむねを注記した。たとえば巻末資料1のNo38などが該当する。

最後に、初版と改訂版との区別について補足しておく。前述のとおり、『心のノート』は2009年、『私たちの道徳』は2016年に改訂されている。それぞれの初版と改訂版を比較したところ、削除された項目は確認できなかった。ただし、『心のノート』の初版「みんなのものだもん」が改訂では「みんなで楽しく気もちよく」に変更されている（巻末資料1のNo27）。そこで重複を避けるため、初版と改訂版とを統合する形で巻末資料をまとめた。その際、改訂により追加された項目について、ページ番号の末尾に「(改訂)」と記入した。たとえば巻末資料1のNo9などが該当する。

(2) 書き込み欄の変遷

巻末資料のデータにもとづき、各教材の書き込み欄の変遷を分析していこう。なお以下、たとえば巻末資料1のNo1に言及する場合は、「1-No1」のように略記する。

まず書き込み欄全体の量的な推移について、学習指導要領に示された道徳教育の4項目ごとにまとめた（表1）。

表1. 各教材の書き込み欄の件数（4つの視点ごと）

	『心』初	『心』改	『私』初	『私』改
自分自身	8	10	19	19
他の人	6	6	16	17
自然や崇高なもの	5	7	11	11
集団や社会	5	13	21	21
その他	4	15	6	16
合計	28	51	73	84

注：『心のノート』は『心』、『私たちの道徳』は『私』、初版は初、改訂版は改とそれぞれ略記した。以下、図4も同様。

合計数から明らかなように、版を重ねるごとに書き込み欄の量が増えている。『心のノート』

初版と『私たちの道徳』改訂版を比べれば、実に3倍の増加量である。増加の主たる理由として、同一のテーマの書き込み欄が1・2年それぞれに分割されていったためと考えられる。同一テーマを学年別に分割した書き込み欄は、『心のノート』初版から順番に、2件、13件、26件、30件と右肩上がりに増加している。具体例を挙げれば、「集団や社会とのかかわり」の項目に、「もっとすてきな学びゅうにするためにあなたにはどんなことができる」かを書き込ませる欄がある（引用は『心のノート』初版72ページ）。この課題は、見出しに若干の相違はあるものの、すべての教材で一貫して設けられている。しかし、『心のノート』初版では「みんなのできることをさがそう」と指示されるのみの書き込み欄が、同改訂版では学年別に分割され、さらに『私たちの道徳』では「家の人から」欄が加えられている（1-No 36, 37 および 2-No 64~67）。

その一方、4項目以外の「その他」に分類される項目も増えている。第一に、「まとめ」に該当する箇所が増えている。『心のノート』を例に確認しておこう。初版では、末尾の見開き1ページに「ころのあるばむ」と題されただけで特に指示文もない白紙のページが存在するのみである（1-No 46）。これに対し改訂版では、「心のアルバム」が学年別に分割されたり、「家の人からの手紙」欄が追加されたりして、「まとめ」部分が見開き3ページに増えている（1-No 47~51）。さらに前者では「うれしかったこと、楽しかったことなどを、自由に書きましよう」、後者では「お子様の成長のために、前向きなメッセージをおくってください」などと、具体的な指示文が追加されていることも注目される。第二に、学習指導要領で示された4項目以外のテーマが盛り込まれる傾向が認められる。すなわち『私たちの道徳』改訂版では、4項目に続き、「よいところを見つけたよ」（2-No 71~77）、「みんなとなかよく」（2-No 78）、「ほかの国のことを知ろう」（2-No 79, 80）が新たに追加されている。

続いて、書き込む主体について検討していこう。巻末資料をもとに、書き込みが求められる主体を分類したところ、児童、家庭、教員、職員、級友が確認できた。これらの主体について、改訂による推移を割合にしてまとめたものが図4である。なお「先生・いえの人から」（1-No 5）のように、ひとつの書き込み欄に複数の主体が想定されている場合が少なくない。そのため、図4の件数は表1の総数を上回っている。

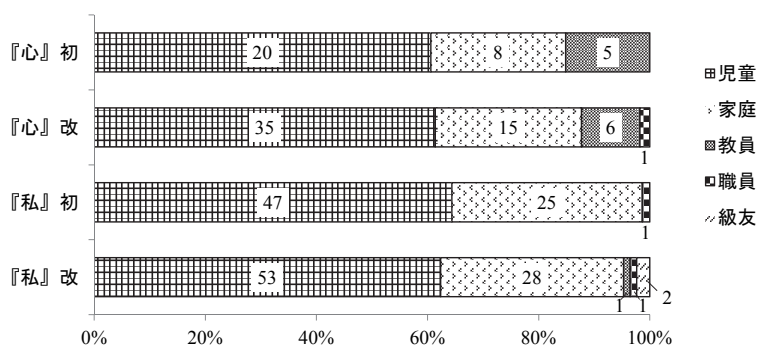


図4. 各教材における書き込みが求められる主体の変遷（グラフ内の数値は実数）

図4について、もっとも書き込みが求められているのは、当然ながら児童である。いずれの教材でも、全体の6割強が児童に書き込みを求めている。一方、学校職員と級友に書き込みを求める事例はごくわずかであった。学校職員が書き込み欄に登場するのは、『心のノート』改訂版からである。ただし学校職員が直接書き込む形ではなく、「どんなことを思ってはたらいっているのか教えてもらおう」とあり、児童による聞き取りの対象とされている(1-No 38)。こうした学校職員に聞き取りを行う課題は、現行の教材まで継続している。級友については、最新の『私たちの道徳』改訂版で初めて登場する。「あなた」の「よいところ」を書き込んでもらうよう指示されている(2-No 75, 76)。

家庭は、教材中では「いえ(家)の人」(以下、「家の人」で統一)などと表記され、児童に次いで書き込みを求められてきた。「べんきょう」や「かかり」など児童の活動にコメントする欄だけでなく、「生まれたときはなし」を聞き取る対象としても登場する(1-No 6, 23)。家庭に書き込みを求める件数は、改訂による増加の割合についていえば、児童を上回っている。

書き込み欄における家庭の割合が増加する一方、教員の登場件数は減少している。教員の登場件数は、『心のノート』初版では5件(改訂版では6件)であったが、『私たちの道徳』初版では0件(改訂版では1件)である。『私たちの道徳』改訂版における再登場は、「あいさつ」をテーマとした箇所である(2-No 23)。ただし「先生・家の人から」とあり、家庭と並列する形での登場である。こうした登場の仕方は、『心のノート』でも同様であり、「先生から」のように教員が単独で書き込みを求められる事例は1件も存在しない。つまり、『心のノート』における「先生・家の人から」欄が、『私たちの道徳』に至り「家の人から」欄へと変容したといつてよい。

『私たちの道徳』の書き込み欄から教員が消滅した理由や編集意図については、現状では明らかにする材料を持たない。改訂作業の過程を詳細に追跡することは、今後の課題である。ここでは、書き込む主体が「先生・家の人」から「家の人」へと変容したことの意味について考察しておきたい。こうした変容により、書き込むことが期待される主体像がより明確化させられたと考えられる。つまり「先生」と「家の人」が並列している場合、両者が書き込むこともあれば、いずれか一方が書き込むだけということもあるだろう。これに対し「先生」が姿を消すことで、書き込むことができるのは「家の人」のみになる。それは、家庭に対し、学校の道徳教育への参画をより明確に求めるような事態と見なせるのではないか。道徳教育用教材から見た場合、学校と家庭の「連携」は、教員が書き込み欄から退く形で推し進められていったことがわかる。

「連携」に関わって、地域社会の人びとに書き込みを求める事例が確認できなかったことを最後に指摘しておく。ただし、「あなたのまちはあなたのことが大すき」と記された「あなたがそだつまち」や、児童が「あなたのまち」を紹介する「新聞」を作成する課題は、細かい文言を変えながらも『心のノート』から継続している(1-No 39, 2-No 70)。また学校教育の現場では、いわゆる「コミュニティ・スクール」に象徴されるように、保護者や地域住民が学校の運営・教育に参画する取り組みが展開されてもいる²⁵⁾。地域社会との「連携」は、調べ学習や地域住民の授業参画など、書き込み欄以外の方法で図られている。この点、家庭との「連携」において「家

の人」が書き込み欄の全面に押し出されてきた過程とは対照的である。

おわりに

道徳の「教科化」が目前に迫るなか、道徳教育を通じた「家庭教育への政治的な介入」とも称されるほど学校と家庭の「連携」が推し進められている。本稿では、こうした現状をふまえ、文部科学省発行の道徳教育用教材を素材とし、学校と家庭、および地域社会との「連携」を再検討するための基礎的考察を試みた。具体的には、教材の書き込み欄について一覧表を作成し、そのデータにもとづき総数や書き込みが期待される主体の変遷を検討してきた。

改訂を重ねるなかで、書き込み欄の数そのものや、家庭（「家の人」）に書き込みを期待する件数が実数・割合ともに増加している傾向が明らかになった。とりわけ、『私たちの道徳』においては、教員（「先生」）が書き込み欄から姿を消すことで、家庭割合の増加がもたらされていた。ここに、書き込み欄において家庭との「連携」が推し進められていく経過が示されている。またその一方で、地域住民に書き込みを期待する事例が一件も見出されなかった。地域社会との「連携」については、読み物教材や調べ学習など、書き込み欄以外の観点から検討する必要があるだろう。

道徳教育用教材の書き込み欄についてみた限り、学校と家庭との「連携」が積極的に推進されている。こうした流れをどのように評価するかは、本稿の射程を超えている。ここでは、学校と家庭が特定の価値観を共有し、「連携」して子どもを囲い込もうとする事態が生じかねない可能性について、注意を促すにとどめたい。本稿で取り上げた教材は、「家族のやくに立」つことや「ふるさとに親しみをも」つこと、あるいは「のびのびと明るい気持ちで毎日をすごす」ことや「ともだちとなかよく」することを子どもたちに求めている²⁶⁾。いずれも、あくまで特定の価値観にもとづく徳目に過ぎず、どのような場面においても、またどのような子どもにも、良好な結果をもたらすとは限らない。とすればそこには、特定の子どもの追い込んだり、排除したりする可能性すら胚胎している。こうした問題については、『心のノート』初版の時点で三宅晶子がすでに指摘している通りである²⁷⁾。

本稿の結果から推測されるように、学校の道徳教育をめぐる「連携」は、今後さらに強化されていくだろう。「教科化」により「連携」のあり方がいかに具体化させられていくのか、注目していきたい。

注

- 1) 表記としては、道徳の「『特別の教科』化」がより正確である。ただし本稿では、文章の煩雑さを避けるため、「教科化」と表記する。なお「特別の教科」の含意については、中央教育審議会の答申や学習指導要領を分析した田村俊輔による研究に詳しい。田村によれば、「特別の

- 教科」には、①通常の教科と同じ「教科内容を扱う役割」に加え、②「学校全体の道徳教育の要の役割」が期待されている。田村俊輔「道徳教育の教科化とその意味」(『清泉女学院大学人間学部研究紀要』第14号, 2017年) 75ページ。
- 2) 藤田昌士「特設「道徳」論争」(久木幸男・鈴木英一・今野喜清編『日本教育論争史録・第4巻現代編(下)』1980年, 第一法規出版)。
 - 3) 三宅晶子「『心のノート』のテキスト・イメージ分析」(『現代思想』第31巻第4号, 2003年), 高橋哲哉『「心」と戦争』晶文社, 2003年など。
 - 4) 歌川光一・鈴木翔「登場人物にみる『私たちの道徳』の特徴——その活用方法および留意点を視野に入れて——」(『名古屋女子大学紀要』第62号, 2016年), 作田澄泰・中山芳一「道徳教科化に向けた今後の新しい教師教育と学校教育の在り方に関する考察——総合単元的な道徳授業カリキュラムから考える真の道徳教育の検証——」(『岡山大学教師教育開発センター紀要』第6号別冊, 2016年), 渡部容子「『道徳の時間』の教材——読み物教材にみる家族——」(『近畿大学生物理工学部紀要』第39号, 2017年)など。
 - 5) 折出健二「戦後教育と道徳の「特別教科化」」(日本教育方法学会編『教育方法44教育のグローバル化と道徳の「特別教科」化』図書文化社, 2015年) 57ページ。
 - 6) 文部科学省が2014年度に公表した「『私達の道徳』活用状況等調査結果」によれば, 小学校20,262校中99.5%, 中学校9,658校中98.4%が『私達の道徳』を「活用」している。http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/_icsFiles/afiedfile/2016/08/09/1222218_4.pdf (2017年9月25日閲覧)
 - 7) 時津啓「小学校『私達の道徳』の分析——その政治的文脈と内容との関係に注目して——」(『広島文化学園大学学芸学部紀要』第5号, 2015年)。
 - 8) 同前, 37ページ。
 - 9) 俵義文「教育基本法改悪の背景とねらい」(子どもと教科書全国ネット21編『ちょっと待ったあ!教育基本法「改正」——「愛国心教育」「たくましい日本人」「心のノート」のねらいを斬る』学習の友社, 2003年) 99ページ。
 - 10) パオロ・マッツァリーノ『反社会学講座』イーストプレス, 2004年など。
 - 11) 「鼎談・道徳教育に将来の夢と希望を乗せて」(『教職研修』2002年8月号) 36ページ。
 - 12) 文部科学省「『心のノート』について(依頼)」2002年4月22日。引用は「子どもと教科書全国ネット21ホームページ」による。
http://www.ne.jp/asahi/kyokasho/net21/siryou_020422kokorono.htm (2017年9月25日閲覧)
 - 13) 奥野佐矢子「道徳教育と『心のノート』」(小笠原道雄・森川直・坂越正樹編『教育的思考の作法2教育学概論』福村出版, 2008年) 237ページ。
 - 14) 『朝日新聞』東京版, 2009年3月22日朝刊。
 - 15) 「道徳教育用教材「私達の道徳」について」2014年2月14日。http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/02/1344132.htm (2017年9月25日閲覧)
 - 16) 『読売新聞』東京版, 2014年4月19日朝刊。
 - 17) 注7前掲, 32ページ。
 - 18) 「産経ニュース」2016年2月4日。<http://www.sankei.com/life/news/160204/lif1602040020-n1.html> (2017年9月25日閲覧)
 - 19) 「旧学習指導要領 第3章 道徳(平成元年度改訂)」。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/old-cs/1322453.htm (2017年9月25日閲覧)
 - 20) 小林万里子「学校における道徳教育1」(丸山恭司編『教師教育講座第7巻 道徳教育指導論』協同出版, 2014年) 135ページ。
 - 21) 注11前掲。なお鼎談の参加者は, 以下の3人である(肩書きは登載時のもの)。押谷由夫(昭和女子大学教授), 芝原弘志(文部科学省教科調査官), 永田繁雄(文部科学省教科調査官)。

- 22) 「下村博文文部科学大臣記者会見テキスト版」2014年7月11日。http://www.mext.go.jp/b_menu/daijin/detail/1349563.htm (2017年9月25日閲覧)
- 23) 「道徳に係る教育課程の改善等について(答申)(中教審第176号)」2014年10月21日。http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/10/21/1352890_1.pdf (2017年9月25日閲覧)
- 24) 文部科学省『私たちの道徳活用のための指導資料(小学校)』。http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/detail/1353661.htm (2017年9月25日閲覧)
- 25) 小西雅美・霜川正幸「家庭や地域社会との連携による道徳教育の充実に関する研究——コミュニティ・スクールの特色を生かした取組を通して——」(『教育実践総合センター研究紀要』第38巻, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター, 2014年)など。
- 26) 『私たちの道徳』改訂版, 44, 74, 138, 150ページ。
- 27) 三宅晶子『「心のノート」を考える』岩波書店, 2003年。

巻末資料 1. 『心のノート』初版・改訂版における書き込み欄

	No	見出し	書き込む主体	ページ	備考(指示文など)
その他	1	このノートに名前をつけてね	児童	1	
	2	あなたのことを教えてね	児童	8-9	1年次、「すきなたべもの」、「すきなあそび」などを書く
	3	同上	児童	同上	2年次、同上
自分自身	4	気もちのいい1日：まい日を気もちよく	児童	15	「きょうかしょ」などの「しまうばしょ」と「たしかめた日」を書く
	5	同上	教員、家庭	15	「先生・いえの人から」
	6	がんばってるね！：しっかりやろう	教員、家庭	17	「先生・いえの人から」
	7	同上	児童	18	「べんきょう」などが「ちゃんとできてる」かどうか色分けする
	8	同上	児童	19	「しっかりできたときの気もちをきろくしておこう」
	9	同上	児童	21(改訂)	同上、改訂版では1,2年次に分割
	10	同上	児童	20(改訂)	「自分でできたこと」を書く
	11	よいことすすんで：ゆう気を出して	児童	22	「あなたのゆう気をきろくしておこう」
	12	同上	教員、家庭	23	「先生・いえの人から」
	13	うそなんかつくもんか：あかるい気もちで	児童	27	1日の「気もち」を色分けさせる
他者	14	あいさつはこころのリボン：げん気にあいさつ	児童	32-33	1年次、「じょうずにあいさつ」できたかどうかを月ごとに色分けする
	15	あいさつはこころのリボン：げん気にあいさつ	児童	32-33	2年次、「じょうずにあいさつ」できたかどうかを月ごとに色分けする
	16	あたたかいところをとどけよう：あたたかいところで	児童	37	「小さい子」や「お年より」に「あなた」が「できること」を書く
	17	同上	教員、家庭	同上	「先生・いえの人から」
	18	ともだちといっしょ：ともだちとなかよく	児童	40-41	「ともだち」からもらった「はげまし」や「うれしかった」言葉を書く
	19	ありがとうをさがそう：ありがとうがいっぱい	児童	45	「ありがとうカード」を書く
自然・崇高	20	生きものをそだてよう：しぜんとなかよく	児童	48	「花のたね」の生育を記録する
	21	同上	児童	62-63(改訂)	1年次、「しぜん」のなかで「見つけたこと」を書く
	22	同上	児童	同上	2年次、同上
	23	みんなみんな生きているよ：いのちきらきら	家庭(聞取)	53	「あなたが生まれたときはなをいえの人にきいてみましょう」
	24	同上	児童	54-55	「げん気だなんてかんじ」た時を書く
	25	こころいっぱいにかんじよう：うつくしいものをかんじて	児童	58-59	「うつくしい」や「ふしぎだな」と感じたことを書く
	26	同上	教員、家庭	59	「先生・いえの人から」
集団・社会	27	みんなのものだもん：みんなのものを大せつに	児童	64-65	学校、公園、図書館での「あなたのしっているきまり」を書く 改訂版では見出しが「みんなで楽しく気もちよく」に変更
	28	同上	児童	74-75(改訂)	1年次、「大切につかっているもの」などを書く

	No	見出し	書き込む主体	ページ	備考(指示文など)
集団・社会	29	同上	児童	同上	2年次, 同上
	30	大切なそれぞれのしごと: はたらくっていいね	児童	79 (改訂)	1年次, 「わたしのしごと」を書く
	31	同上	児童	同上	2年次, 同上
	32	同上	教員, 家庭	同上	「先生・いえの人から」
	33	かぞくが大すき: かぞくっていいね	家庭	67	「こんな人にそだってほしい」という「ねがい」を書く
	34	同上	児童, 家庭	69	「かぞくのやくに立った」ことを書く
	35	同上	児童	83 (改訂)	同上, 改訂版では1, 2年次に分割 「いえの人にかいてもらおう」が削除
	36	おせわになってます!: 学校大すき	児童	73	「みんなでできること」を書く
	37	同上	児童	87 (改訂)	同上, 改訂版では1, 2年次に分割
	38	同上	職員(聞取)	84 (改訂)	「学校でおせわになっている人たち」に聞き取る
その他	39	あなたがそだつまち: わたしをそだてるまち	児童	76-77	「あなたのまちのすてきなところ」を紹介する「しんぶん」を作る
	40	がんばったようれしかったよできるようになったよ!!	児童	94-95 (改訂)	1年次, 指導要領4つの視点について書く
	41	がんばったようれしかったよできるようになったよ!!	児童	同上	2年次, 指導要領4つの視点について書く
	42	あのね…こんな道とくのべん強をしたよ	児童	96-97 (改訂)	1年次, 「道とくの時間にべん強したことを家の人に教えよう。」
	43	同上	児童	同上	2年次, 「道とくの時間にべん強したことを家の人に教えよう。」
	44	同上	家庭	同上	1年次, 「家の人から」
	45	同上	家庭	同上	2年次, 「家の人から」
	46	こころのアルバム	児童	78-79	
	47	心のアルバム 1, 2年	児童	98-99 100-101 (改訂)	「うれしかったこと, 楽しかったことなど」を書く 改訂版では1, 2年次に分割
	48	家の人からの手紙	家庭	102-103 (改訂)	「お子様の成長のために, 前向きなメッセージをおくってください。」
	49	同上	家庭	102-103 (改訂)	1年次, 同上
	50	同上	家庭	102-103 (改訂)	2年次, 同上
	51	同上	家庭	102-103 (改訂)	3年次への進級前, 同上

巻末資料2. 『私たちの道徳』初版・改訂版における書き込み欄

	No	見出し	書き込む主体	ページ	備考(指示文など)	
その他	1	あなたのことを教えてね	児童	6-7	1年次, 「すきなたべもの」, 「すきなあそび」, 「とくいなこと」などを書く	
	2	あなたのことを教えてね	児童	同上	2年次, 同上	
自分自身	3	きそく正しく気もちのよい毎日を	児童	13	1年次, 「きょうかしょ」, 「ランドセル」など「たしかめた日」を記入する	
	4	同上	児童	同上	2年次, 同上	
	5	同上	家庭	同上	「家の人から」	
	6	同上	児童	14	「かたづけ」について「どうすれば気もちよくすごせるか」を書く	
	7	同上	児童	15	1年次, 「本」, 「ふく」など「たしかめた日」を記入させる	
	8	同上	児童	同上	2年次, 同上	
	9	同上	家庭	同上	「家の人から」	
	10	自分でやることはしっかりと	家庭	23	「家の人から」	
	11	同上	児童	24	1年次, 「じぶんでやらなければならないこと」ができたら色を塗る	
	12	同上	家庭	24	1年次, 「家の人から」	
	13	同上	児童	25	2年次, 「じぶんでやらなければならないこと」ができたら色を塗る	
	14	同上	家庭	25	2年次, 「家の人から」	
	15	よいと思うことはすすんで	児童	36	1年次, 「あなたができたよいと思うこと」と「できたときの気もち」を書く	
	16	同上	児童	37	2年次, 同上	
	17	すなおにのびのびと	児童	45	「正直にできたときの気もち」を書く	
	18	同上	児童	46	1年次, 1日を「のびのびと明るい気もち」で過ごせたら色を塗る	
	19	同上	家庭	同上	1年次, 「家の人から」	
	20	同上	児童	47	2年次, 1日を「のびのびと明るい気もち」で過ごせたら色を塗る	
	21	同上	家庭	同上	2年次, 「家の人から」	
	他者	22	気もちのよいふるまいを	児童	54-55	「毎日の生活」での「あいさつ」を書く
		23	同上	教員, 家庭	55 (改訂)	「先生・家の人から」
24		同上	児童	56	1年次, 「できるようになりたいあいさつ」を書く, 「あいさつができたら」色を塗る	
25		同上	家庭	56	1年次, 「家の人から」	
26		同上	児童	57	2年次, 「できるようになりたいあいさつ」を書く, 「あいさつができたら」色を塗る	
27		同上	家庭	57	2年次, 「家の人から」	
28		同上	児童	58	「あいさつができたときの気もち」, 「あいさつをされたときの気もち」を書く	
29		同上	家庭	58	「家の人から」	
30		同上	児童	59	「ほかにどのようなれいぎがあるか」を書く	

	No	見出し	書き込む主体	ページ	備考(指示文など)
他者	31	あたたかい心で親切に	児童	66-67	「小さい子」や「お年より」に「どのようなことをするとよろこばれる」かを書く
	32	同上	家庭	67	「家の人から」
	33	ともだちとなかよく	児童	76	1年次、「ともだちとなかよく」したことを書く
	34	同上	家庭	76	1年次、「家の人から」
	35	同上	児童	77	2年次、「ともだちとなかよく」したことを書く
	36	同上	家庭	77	2年次、「家の人から」
	37	お世話になっている人にかんしゃして	児童	86	1年次、「ありがとうをつたえたい人」への「気もち」を書く
	38	同上	児童	87	2年次、同上
自然・崇高	39	いのちを大切に	家庭(聞取)	91	「あなたが生まれたときの話を、家の人に聞いて書きましょう」
	40	同上	児童	91	1年次、「あなたの名前を、ていねいな文字で心をこめて書きましょう」
	41	同上	児童	91	2年次、同上
	42	生きものにやさしく	児童	102	1年次、「生きものをそだてたときのこと」を書く
	43	同上	児童	103	2年次、同上
	44	すがすがしい心で	児童	111	1年次、「すてきなものに会ったときのこと」を書く
	45	同上	児童	111	2年次、同上
	46	同上	児童	114	1年次、「うつくしい」や「ふしぎだな」と感じたことを書く
	47	同上	家庭	114	1年次、「家の人から」
48	同上	児童	115	2年次、「うつくしい」や「ふしぎだな」と感じたことを書く	
49	同上	家庭	115	2年次、「家の人から」	
集団・社会	50	やくそくやきまりをまもって	児童	120	学校での「やくそくやきまり」を書く
	51	同上	家庭	120	「家の人から」
	52	同上	児童	121	町での「やくそくやきまり」を書く
	53	同上	家庭	121	「家の人から」
	54	同上	児童	122	「みんながつかうもの」を書く
	55	同上	児童	123	「みんながつかうもの」を「どのようにつかえばよいか」を書く
	56	はたらくことのよさを感じて	児童	133	1年次、「みんな」のために「しごと」を「がんばったときの気もち」を書く
	57	同上	児童	133	2年次、同上
	58	家族のやくに立つことを	家庭	139	「家の人からのメッセージ」
	59	同上	児童	142	1年次、「家のでつだいをしたときのこと」と「気もち」を書く
	60	同上	家庭	142	1年次、「家の人から」
	61	同上	児童	143	2年次、「家のでつだいをしたときのこと」と「気もち」を書く
	62	同上	家庭	143	2年次、「家の人から」

	No	見出し	書き込む主体	ページ	備考(指示文など)
集団・社会	63	学校の生活を楽しく	職員(聞取)	145	「学校でお世話になっている人たち」に聞き取る
	64	同上	児童	146	1年次, 学校や学級のために「みんなでできること」を書く
	65	同上	家庭	146	1年次, 「家の人から」
	66	同上	児童	147	2年次, 学校や学級のために「みんなでできること」を書く
	67	同上	家庭	147	2年次, 「家の人から」
	68	同上	児童	148	1年次, 「すき」な場所や勉強など, 「学校で楽しかったこと」を書く
	69	同上	児童	149	2年次, 同上
	70	ふるさとに親しみをもって	児童	152-153	「あなたの町をしょうかいする新聞」を作る
その他	71	よいところを見つけたよ	児童	158(改訂)	1年次, 「自分のよいところ」を書く
	72	同上	児童	同上	2年次, 同上
	73	同上	家庭	159(改訂)	1年次, 「家の人」に「あなたのよいところ」を書いてもらう
	74	同上	家庭	同上	2年次, 同上
	75	同上	級友	161(改訂)	1年次, 「ともだち」に「あなたのよいところ」を書いてもらう
	76	同上	級友	同上	2年次, 同上
	77	同上	児童	同上	「あなたのよいところ」を読んだ感想を書く
	78	みんなとなかよく	児童	169(改訂)	「あなたがうさぎさんだったら, どうする」かを書く
	79	ほかの国のことを知ろう	児童	172(改訂)	1年次, 「ほかの国からきたもの」を探して書く
	80	同上	児童	同上	2年次, 同上
	81	道徳で学習したことを書きましよう	児童	158	1年次, 「道徳で学習したこと」を書く
	82	同上	家庭	158	1年次, 「家の人から」
	83	同上	児童	159	2年次, 「道徳で学習したこと」を書く
	84	同上	家庭	159	2年次, 「家の人から」

